

# 大学と国際交流

——異文化間コミュニケーション論の立場から——

## A Thought On International Affairs At Colleges And Universities

From The Perspective Of Intercultural Communication

(1991年4月3日受理)

佐生 武彦  
Takehiko Saiki

**Key words:** 国際交流, 短期留学, 文化相対主義, 異文化間コミュニケーション

### はじめに

イラクのクェート併合から湾岸戦争の勃発に至る過程でいやというほど見せつけられた日本人の非国際性の為か、一頃盛況であった「国際化」なる呼び声も、今では虫の音ほど小さくなった様に感じられる。なるほど、「一國平和主義」などという離れ技を半ば無意識の内に演じてしまった多くの日本人に対して、もはや「国際化」のスローガンほど白けさせるものは無いのかもしれない。日本人にとっての湾岸戦争は人質の解放と共に終わりを告げたと揶揄されたことも、戦争終結後に予測される雨後の筍の如くまたぞろ咲き乱れるであろう「国際化」の雄叫びも、古来日本人が育んできた台風一過のメンタリティーを思い起こせば、べつだん不思議な現象でもない。

この「狂い咲き」が再び端緒を開く前に、過去十数年間の諸大学に於ける「国際交流」を考える際に、意識するか否かは別として、常にその理念的支柱として掲げてこられたと思われる文化相対主義、特にその評価的側面について、異文化間コミュニケーション (Intercultural Communication) 論の立場から批判的に考察し、今後の「国際交流」に求められる思考の一端を提示するのが本小論の狙いである。

### I 「送り出し中心の国際交流」からの脱却

ここ数年来、日本の大学、特に私立の諸大学は、短期留学或るいはホームステイという名目で、大挙して学生を送り出すシステムの確立とその作動に活発である。大学入学者数が急減する年を目前に控えての、いわゆる「大学冬の時代」を生き延びる為の生存競争の一環と言ってしまうればそれまでであるが、「国際人の育成」という時代の要請に応える試みであることに疑問の余地はない。しかしながら、この「送り出す」という行為に懸命になるあまりに、「国際交流の空洞化」という問題が見過ぎされがちであることもまた事実である。つまり、海外に学生を送り出すことが国際人を育成する道であるという甚だ楽観的な風潮の渦中で、諸大学に学ぶ留学生と日本人学生との地道な交流が相対的に軽視されている傾

向にあり、両者の交流を促進させる為の適切な措置が取られていない、というのが今日の状況ではなからうか。筆者は過去十数年に渡る「送り出す国際交流」を一応は正当な試みと評価する一方で、あくまで過度期のアプローチとして位置づけている。昨今の流行言葉で表現すれば、大学に於ける国際交流は、今やそのパラダイムの大きな転換期を迎えていると言えよう。

## II-1 短期留学の功罪

夏期・春期等の休暇を利用して行われる短期留学またはホームステイというプログラムが持つ主要な狙いは、学生達に異文化を体験させ、自己の文化を相対化させることであろう。たとえ短期間であれ、現地に赴いての異文化との接触は、馴れ親しんだ自己の行動様式が思うように機能しないことに気づかせ、多元的な「現実」の認識を可能にする。さらに、ホストファミリーとのやり取りを通して、半ば露骨に暴露される自文化に対する理解不足は、帰国後の学生達を自文化の再度の学習に駆り立てる。いわば、「ショック療法」としての短期留学が持つ効用は、むしろ積極的に評価されてしかるべきである。

反面、短期間の留学がホスト文化に関してはえてして表層的な理解（時に誤解）しかもたらさないという限界を有する。これには諸々の原因が考えられるが、思いつくままに幾つか上げてみれば、1) 滞在（すなわち観察する）期間が余りに短すぎる。2) 総じて語学力が不足している。3) 精神的に普段とは違う状態（少なからず「舞い上がった」或るいは「落ち込んだ」状態）にあること。4) あくまで客としての特例的対応を受ける傾向にあること。5) ホスト文化に関するステレオタイプ的な知識を多少なりとも詰め込んでいる（恐らく十分に咀嚼せずに、飲み込んだ格好で）為に、見聞される諸事象は往々にしてそれらの知識を確認・補強するものに限られる、という人間の知覚作用に見られる傾向に、一層の拍車がかかると思われること。

この様に、いわば物事を真に理解・判断する（と言っても、あくまで自文化のフィルターを通してのそれであるが）には、余りにも悪条件が揃い過ぎた状態での異文化との接触であるにも関わらず、時として「けっこう理解し合えた」或るいは「人間どこへ行っても同じだ」という類の発言を耳にする。前者の場合、恐らくカタコトの現地語と身振り・手振りで獲得した「感覚的“相互”理解」に基づいた本人の実感であると思われるが、だとすれば、甚だ短絡的かつ不謹慎な発言だと言わざるを得ない。ひっきょう、異文化を巻き込んだ物事の評価に対しては、判断に必要な情報が出揃うまで、人はどれほど慎重になっても過ぎることはないのであって、一時の実感（特に初期のそれ）はあくまで検証を要する「仮説」として留保する心掛けが必要となる。「果たして本当に理解し合えたのか」という反省と疑問が自身に問われない限り、極めて危険な楽観主義が横行する契機を上記の発言は備えていると言える。

後者の発言に至っては、専ら閉口するしか術を知らない。人間としての生物学的な諸特性と文化に属するものとの甚だしい混乱としか思えないからだ。曰く、「彼等も怒る時には怒るし、泣く時には泣くし……」。当たり前であろう。いつ、何処で、如何なる理由で、そして如何に対処されたか等に関しては、発言者の観察は著しく貧弱なことがある。勿論、「何処も日本とあまり変わらない」という発言に対しては、それ相当の理由があつて頭ごなしに非難するには当たらない。なぜなら、恐らく最も大量に学生を受け入れている米国など「文明」の次元で日本と同等のレベルにある文化では、周到な言葉によるコミュニケーションを抜きにしては、異質な部分がかえって見えにくいということがあるからだ。

私事で恐縮ではあるが、六年半に及ぶ米国での滞在中に筆者が上の発言と同様の結論に達した頃には、

渡米以来すでに四年ほどの月日が経過していたと記憶する。勿論、彼我の文化にはどう仕様もないほどの違いが少なからず存在することを痛感してからのことであって、その後の「類似点が相違点に勝る」という認識に加え、相違点の執拗な追求は両文化にとっての健全な相互作用を妨げる為に、共通の足場としての類似点をむしろ意識的に強調する立場を取るに至ってからのことである。

短期留学が、この性格上、語学研修という目的をもっており、従って、参加する学生も端から現地語で込み入った話し合いが出来ない状態を必然的に背負い込むという事情を考慮すれば（筆者は、言語によるコミュニケーションこそが異文化を含む広い意味での他者との相互理解を可能にするものと信じている）、表層的なホスト文化理解であれ、その後の勉学への突破口と成り得る可能性を有する限り、素直にその価値を認めるに吝かではない。但し、「その後」に関しては、参加する学生の資質に負うところ大であって、極めてギャンブル性の高いものと言わざるを得ないのもまた事実である。

## II-2 短期留学と文化相対主義

自文化或いは自己を相対化させる、という短期留学が持つ効用については既に指摘した。異文化との接触は、自文化に支配的な思考方法や行動様式、或いはコミュニケーションのパターン等を制御する情報体系としての文化に、時に激しく揺さぶりを掛ける。かつて、意識にすら上らなかつた己の文化が初めて客体として対象化されるのである<sup>1)</sup>。それまで絶対的な規範として厳然と君臨した自己の文化は、この対象化のプロセスを通して、相対化される。自己の文化も多様な中の一つに過ぎないという認識は、自文化をして「脱中心」への作業に誘う。ここに至っては、物事（善悪）を裁断する普遍的な価値基準など何処にも存在し得ないという認識から、諸文化の間には優劣の区別は無く、ただ差異のみが残る、という文化相対主義の立場が確認される。文化を相対的に理解するというこの視点は、自文化中心主義の愚と、それがもたらす偏狭な人間精神を廃し、「異質」なものを在るがままに認めるという寛容性を説く。

文化相対主義が提示する二つの視点、つまり、普遍的な価値基準の喪失から生じる曖昧性に対する忍耐力、並びに多様性に対する寛容性が、共に異文化理解という営みに不可欠な姿勢であることは、誰しもが認めるところであろう。従って、これらを身をもって会得する機会としての短期留学の存在価値は、幾ら強調しても過ぎることはない。しかしながら、短期留学で成し得ることの上限は、残念ながら「ここまで」であって、短期留学に内在するこの限界は文化相対主義が持つ有効性の限界に相応するという認識が同時に確認される必要がある。換言すれば、上に記した姿勢の獲得が遂行されてからの文化相対主義との執拗な係わりは、今後の諸大学に求められる国際交流の在るべき姿に対して足枷にこそなれ、決して有益なものとは成り得ない。

## II-3 文化相対主義の限界

異文化に対する倫理上の裁断を回避する為に文化相対主義が提示する「文化に優劣はなく、差異のみが在る」とする考え方は、ある歴史的時点で観察された諸文化に支配的に見られる行動様式等を、それらの潜在的変性を考慮せずに半ば乱暴に固定化し、恒常的なものとして捉えるところに成立する。この考え方は、とどのつまり「異」を根幹に据えたスタティックな文化観であって、明らかに文化を生成

するプロセスとして捉える視点ではない。文化の概念から「変化」というダイナミズムを奪い取るこの考え方は、同じく生成する異文化との交流を通して互いに変容させ合う可能性の欠如を示唆する。

昨今の日本文化論、特に米国との比較に見られる「集団主義VS個人主義」、或るいは「縦社会VS横社会」等々に見られる二極並列的な図式も、いつとき顕著に観察された人間関係の在り方等を彼我の文化があたかも恒常的に備えている特質かの如く捉え、固定するという意味で、ここで言う文化相対主義の特性（限界）を共有していると言える。これらの見解が、互いに決して交わることもなければ、変容に向かって互いに関与し合うこともない、傍観的な、或るいは絶息の昆虫を眺めるかのような「標本主義」的な異文化理解を促進しこそすれ、彼我の相互作用を通しての新たな文化創造に際しては、さほど有益なものになるとは思われない。

周知の様に、文化相対主義は人類学の所産である。いわゆるフィールドワークと呼ばれる異文化に於ける人類学者の作業目的は、彼等が現地で遭遇する、時に奇異に映る風習や慣習が個々の成員にとって如何なる意味を持つのかを発見し、その文化全体の文脈の中でそれらが如何なる機能を担うのかを見極めることであり、それら慣習等に関する客観的記述や解釈をもって多様な人間文化の理解を促進することにある<sup>2)</sup>。この作業にあたって、人類学者に要求されることは、観察の対象にある文化とは常に不即不離の状態（或るいは超然とした態度）を堅持することであって、その文化に変化を及ぼすことは原理的に許されることではない。さもなければ、記述された文化は、極端な場合、「当該文化+ $\alpha$ （人類学者の影響による所産）」ということになり、人類学の営みは根底からその価値を失うことになる。「変化」という要素の極めて希薄な文化相対主義なる考え方が人類学を出自とし、広く比較文化論の世界で受け入れられている所以であろう。

翻って、コミュニケーションとは必然的に「変化」というダイナミズムを前提にした概念であって、異文化間のコミュニケーションともなれば「変化」が常態であると言っても過言ではない。一般に同類の学問として混同される傾向にある比較文化（cross-cultural comparisons）と異文化間コミュニケーション（intercultural communication）の両者は、実のところ、この「変化に関与するか否か」を境にして袂を分かつのである。

国際交流に携わる学生達にとっても、人類学者が持つ異文化に対する超然とした態度は当然要求されてしかるべきであって、文化相対主義もここに於てその効力を発揮する。しかし、彼等一人一人は、決して人類学者ではなく、むしろ広い意味での異文化間コミュニケーター、換言すれば、潜在的な「変化のエージェント」である。従って、この文脈で語られる「異質性」に対して無限の寛容性を説く文化相対主義なる思想の行き着く先は、残念ながら異文化に対する「内政不干涉」の機運とニヒリズムの増長でしかない。

なるほど、文化相対主義の登場は、程度の差こそ有れずすべての人間に備わっている自文化中心主義を戒めるのに成功し、対等な立場（これは多分に理想主義的な思い入れであろうが）での、異文化間コミュニケーションを可能にした。しかし、文化相対主義が諸文化の間で遍く受け入れられる時、つまりこの思想が絶対化するに及んで、異文化に対する批判は如何なるものであれ反相対主義的な発言として「合法的」に葬られる運命にあり、自文化に不都合な批判を封じ込める為の「盾」として、これほど都合の良いものはない、ということになる。文化相対主義と自文化中心主義という一見して対局に位置すると思われたこれら二つの思想は、最終的に「反コミュニケーション」の地平に於て収斂する。換言すれば、文化相対主義は必然的にもう一つの自文化中心主義を己の内に抱え込んでいるのである。反コミュニ

ケーションなる要素を内在させ、潜在的変性を考慮せずに文化を固定して眺める文化相対主義は、傍観的で自己完結的な異文化理解を越えて、新たな文化創造に寄与しようとする異文化間コミュニケーション（筆者は、これこそが本来の国際交流のあるべき姿であると思っている）とは、これら二つの意味に於て互いに相容れない関係にあるといえる。

## II-4 文化相対主義の限界と日本型コミュニケーション

上記した文化相対主義が孕む逆説的な傾向が、特に顕著に表出する文化を考えてみた場合、恐らく日本ではなかるうかと思われる。今後の国際交流を考える際に、文化相対主義をただ盲目的に持て囃すかに映る昨今の風潮に対して、筆者が少なからず危惧の念を抱く原因がここに在る。勿論、その潜在的変性を十二分に考慮して記す訳であるが、日本人が久しく培ってきたコミュニケーションの型は、「両立型」のそれであると言われる<sup>3)</sup>。両立型コミュニケーションの諸特徴を幾つか上げてみれば、1) AB両者の相互作用（対人間、集団間、文化間の別を問わない）は、その過程で一方が他方に「同化」することによって終了するが、AがBに同化した場合を例にとると、2) 相互作用の開始点でAが保持していた意見や考え（広義の情報）は、終了時に於ても引き続き保持される。「建前の同化」或るいは「不詳々々の同化」と呼ばれる所以である。両立、即ち異質なものを並存させることを可能にするこのコミュニケーション型に久しく慣れ親しんだ日本人にとっては、文化相対主義の考えを受け入れる土壌は、人類学者が提唱する遙か以前に、既に出来上がっていたとも考えられる。これに反して、片立型の同化と呼ばれるコミュニケーション型では、Bに対するAの同化はいわゆる「本音」のレベルで行われる為に、Aの意見等が後に尾を引くことはない。古来ギリシャの時代より、西洋人がレトリックの名の元に追求してきたコミュニケーション型であり、両立型の志向性に比べ極めて排他的であると言える。西洋人自らが、自らを戒める為に、敢えて文化相対主義を打ち出す必要があった理由も、この片立型のコミュニケーションと深く関わっている様に思われてならない。

両立型のコミュニケーションは、その三つ目の特徴として、ここでの議論にとって更に重要な型を提示している。両立型の「分立」と呼ばれるもので、相手への同化が得られない場合、或るいは得る必要のない場合に生じる、AB両者間のコミュニケーション上の分断、或るいは決裂である。個人のレベルで言えば「相手にしない」、国家に即して言えば「鎖国」の状態と言える。既に多くの学者が指摘している様に、日本の歴史は、この「同化」と「分立」の絶え間のない繰り返しであった<sup>4)</sup>。片立型のコミュニケーションが提示する「対立」というもう一つの型が、共に己の覇権を争ってではあるが、少なくともAB両者の間にコミュニケーションの継続を認めるのに対して、両立型の「分立」は「コミュニケーションの不在」という形を必然的に露呈してしまうのである。歯止めのない文化相対主義と自文化中心主義、そして日本人、これらの三項が連結するのは、正にこの時点なのである。

冒頭で触れた湾岸戦争の際に日本人が見せた「無原則な平和主義」と「一国平和主義」との関係が、筆者には何故か二重になって映るのである。無論、この問題に関しては、日米安保条約に加え平和憲法という政治的な要因を抜きにして語られる性格のものではないが、コミュニケーションが文化を造り出すという因果関係を考慮すれば、極めて日本的と言える両立型のコミュニケーションが、間接的にはあれ今回の「平和騒動」に関与していたと思われるのである。そして、「歯止めのない文化相対主義」からの「自文化中心主義」、及び「無原則な平和主義」からの「一国平和主義」、という二つの図式に欠落

しているものは「他者へのコミットメント」ということになる様に思われる。

### III-1 文化相対主義を越えて

以前にも増して急速に縮小しつつある今日の世界。更に、地球的規模で動き出した雑多な人の群れ。これらの状況を鑑みる時、「世界文化（倫理）」の創造は既に必然の二字をもって模索される段階に入った様に思われる。従って、多分に困難が予測されるこの創造に向かって、いま諸文化に求められているものは、決して「異」に対する消極的な寛容性ではなく、彼我の「類似性」に立脚して互いに歩み寄る精神に他ならない。そして、この歩み寄りの営為にあたっては、往々にして「不条理」に映る他文化の異質性と共に、自文化の内に他者が見る異質性を言葉によるコミュニケーション、つまり、言論をその手段として批評する精神を不可欠のものとする。更に、後者の異質性の批評に対しては、山崎正和氏の言葉を借りれば、「いわくいいがたい」文化のレベルから説明可能な文明のレベルに昇華する不断の努力が要請される<sup>9)</sup>。結局、新しい文化の創造といえども、人と人のコミュニケーションを媒介にして為されるものであって、異なる価値観の建設的な衝突を通しての折衝を回避しては決して成就するものではない。文化相対主義の限界は、この創造に不可欠な「衝突」を亡きものにするところにある、と言っても過言ではない。

### III-2 求められる留学生との地道な交流

幸い日本語が、かつての「島国言語」を脱して国際語の様相を顕にしつつある。諸大学に学ぶ留学生と日本語による交流は、言論を通しての新しい文化の創造に際して、「言うべきは言う」という英語など他者の言語を用いては、時に困難な作業を可能にするばかりではなく、同時に今後日本人に求められる明晰でかつ論理的な日本語の用法を習得する機会と成り得よう<sup>10)</sup>。更に、より重要なことであるが、二年或るいは四年という比較的長期に渡る交流を通して留学生と共有する喜怒哀楽の経験は、個別的な異文化理解という枠を越え、より普遍的な人間理解へと学生達を導くものと思われる。政治的、或るいは経済的な利害と力関係に規定された人間関係は往々にして一方に対する無批判の同化を強いる傾向を内に孕んでいる。言いたいことを言い合い、理想論をぶつけ合うことが出来る対等の人間関係を生み出すのは、直接的な利害関係にない学生時代の特権なのかもしれない。このことは、留学生との交流に於いても同様であろう。

従って、今後諸大学に求められる国際交流の少なくともその中心を担う活動は、長期に渡る留学生とのこの特権を活かした着実な交流であって、言論を手段とした世界文化の創造を展望するものでなくてはならない。短期留学に代表される「送り出す国際交流」は、前述した様に、ショック療法としての効用を発揮すると共に、異文化に友を作るという実効的な効用の為に今後とも引き続き行われるべきであるが、異文化に目覚めた帰国後の学生達の為の受け皿が準備されていない場合、つまり「送り出し」の国際交流で留まるものであるとすれば、「学生時代の楽しい思い出」を残すだけで、その教育的価値は半減するものと思われる。

## Notes and References

- 1) ブラジルの日本人移民に関して、前山(1979)は、「……周囲に異人種で異人文化を持った人たちだけが圧倒的に多い中で生活を始めてみて、初めて移民たちは、異なった自分と違う異質な人々との接触の中で、その人たちと対比して、『ああ、俺は日本人なんだ』と自分をだんだん認識していく」と述べ、更に「……いわば日本人は、ブラジルに着いてから『次第に日本人になった』のです」と加えている。誠に含蓄のある言葉である。前山隆『日系人と日本文化』外務省国際協力事業団編『海外移住の意義を求めて』外務省国際協力事業団、1979年。
- 2) Richard A, Barrett. Culture and Conduct: An Excursion in Anthropology. Wadsworth Publishing Company, Belmont, CA. 1984.
- 3) 遠山淳『日本文化と両立型コミュニケーション』, 異文化間コミュニケーション研究, 創刊号, 1989年, 神田外語大学異文化間コミュニケーション研究所。
- 4) 増田義郎『純粹文化の条件』, 講談社, 1967年。
- 5) 山崎正和『文化開国への挑戦』, 中央公論社, 1987年。
- 6) ここでの筆者の発言を受けて、日本語を偏重していると思われるむきもあろうが、そうではない。日本語の論理的な用法を駆使しての活発な議論を構築する過程は、物事を批判的に考察する能力を養い、国際的に多用されている片立型コミュニケーションの習得をも可能にするであろうことを念頭に置いてのことであり、更に国際語としての英語学習にあたって相乗効果を期待してのことでもある。